

二〇二二年二月二十九日

枯蓮田三角定規並ぶごと  
婆ちやんと笑顔で話す帰省の子  
玉の日を纏ふ冬芽のうぶ毛かな  
みどりごの産毛を宿す冬芽かな  
大綿の路地はこの先行きどまり  
小夜覚めて病室に聞く冬の雨

二〇二二年二月二十八日

思い出の一つ一つや古日記  
生かされて明日への糧の日記買ふ  
手作りの干支を飾りて年用意  
枯菊を焚きて一句を成さむとす  
空調の音冴え手術室孤独

二〇二二年二月二十七日

白蛇の大絵馬がかげ年用意  
懐に古墳を抱き山眠る  
供花買ひて通夜の道行き月冴ゆる  
賽銭箱磨き産土神年用意  
数へ日の黒門町の活気かな  
夜回りの不揃ひなるは夫の声

二〇二二年二月二十六日

節くれの仁王の足へ冬日射す  
煙り噴く炭焼き窯の野獣めく  
野良猫の行き来自由や門ぬくし  
黙々と交はす筆談風花す  
頼みとす葉絶やさず去年今年  
雑談の声も混じりて夜廻り来  
冬ざれの淀は銀色砥のごとく

二〇二二年二月二十五日

ともえ

三刀

せいじ

せいじ

きづな

よし女

わかば

わかば

満天

雅流

よし女

ぽんこ

有香

こすもす

よし子

百合

満天

宏虎

よし子

つくし

よう子

ともえ

きづな

菜々

湯豆腐の味を問はるる京言葉

霜に立ち素足に草鞋大師像

県境のダム湖を駆けて寒波くる

老夫婦切り分け食ぶる聖菓かな

年用意とて百均をうろうろす

読み聞かせるたる子眠る聖夜かな

ぼろ市の人垣越しにのぞき行く

裸木の瘤隆々とたくましき

タンカーの進むともなき冬の風

二〇二二年二月二十四日

茶柱の立ちて佳き日や一茶の忌

忌を修し一族郎党ふぐの宿

とれとれの菜の根をすすぐ寒の水

身罷りし愛犬悼む寒昂

小走りす小雪ちらつく赤信号

前山の杉の美林へ風花す

庭柚子を贅に浮かべて至福の湯

朝一の釣銭悴む手から手へ

二〇二二年二月二十三日

歳晩の寺苑狼藉めく轍

柚子の香やあごまでお湯に漬かりけり

日帰りで辞すふるさとの雪景色

ほかほかの太鼓焼買ひ懐へ

小走りに吾を追ひぬける師走人

炭を焼く煙なるべし峠道

雲切れて日矢射しをれど片時雨

宏虎

菜々

よう子

よし女

はく子

有香

なつき

満天

わかば

宏虎

きづな

とろうち

ぽんこ

つくし

雅流

あさこ

よし子

菜々

とろうち

きづな

三刀

よし子

雅流

せいじ

毎日句会みのある選・二〇二二年二月三二日